

ヤスクニ・社会問題委員会ニュース

2019年8月15日

発行 日本キリスト教会北海道中会ヤスクニ・社会問題委員会

<巻頭言>

《世のための教会》

《教義は政治的テキスト》ということ

一息苦しい時代が近づく日々に一

渡辺 輝夫

参院選が後半にさしかかった7月15日夕、選挙応援に来札していた安倍晋三首相に向けて批判の声を上げた市民が警察権力によって力づくで排除された。決してトラブルを起こす様子ではなかったという。もうそこまで来てしまったのか… そう思いながら、わたしの脳裏に今から34年前、1985年8月15日の光景が一気によみがえってきた。私的な回想を綴ることをお許し願いたい。



その日は国内が異様な空気に包まれていた。時の中曽根康弘首相が戦後初めて靖国神社に「公式」参拝するという。当時わたしは東京中会恵泉伝道所で教師試補として駆け出したばかり。主任教師が小川武満牧師だった。同じ敷地内に住んでいたわたしは、牧師夫妻と共に、靖国神社へ抗議行動に出向いた。首相を乗せた車列はまだ到着しておらず、わたしたちは日陰を求めて待機していた。そこに静かにあらわれたのが井上良雄先生。わたしはこの時思った。この光景をしっかりと目に焼き付けておこう、と。

《8月15日・靖国神社・

井上良雄・小川武満》



「井上良雄」といえば、将来を嘱望された文芸評論家。それが、戦争の暗い谷間の

時代、突然文壇から消えたあと、戦後、改革教会の神学的巨匠K・バルトの翻訳家そして平和運動の指導者としてキリスト教界に躍り出た（雨宮栄一『評伝井上良雄—キリストの証人』新教出版社参照）。わたしがはじめて先生にお目にかかったのは、東京・世田谷にあった当時の神学校。小さな教室で、和解論のドイツ語をたどたどしく訳す数人の学生を前に寡黙な先生はじっと忍耐しながら相手をしてくださった。…教会が教会である徴は何か、説教と聖礼典。宗教改革以来の伝統的なアウクスブルク信仰告白の線を踏襲しつつ、しかし、その教会は何のためにあるのか…とバルトはさらに問いかける。《世のための教会》。わたしはその時、電撃に打たれたような強い衝撃を受けた。そうか、教会は教会として自己完結してはならない。世へと開かれてはじめてその使命を全うするのか。



「小川武満」。中国東北部・旧「満州」奉天生まれ。日本キリスト教会生粋の牧師でありながら、あの731部隊の満州医科大学卒という異色の存在。先生はいわゆる十五年戦争の生き証人、身をもって「戦争」の実態を知っておられた。どこから来襲してくるともしれぬ「敵」を前に歩哨に立った恐怖の夜。「戦争神経症」という言葉も先生からはじめて伺った（野田正彰『戦争と罪責』岩波書店 第2章参照）。それはのちキリスト者遺族の会、平和遺族会の運動へと結実していくことになる。晩年は自らと教会の戦争罪責告白を込めた中国訪問の旅を企画し続けられた。内モンゴルの大平原に寝そべって大空を共に仰いだひと時が懐

かしい。



両者は旧知の仲であった。教会教義学(和解論)の翻訳をライフワークに後半生を歩む井上良雄。みずからを権力の前にさらしてその暴走を留めようとする(なんとその前年、私的に参拝に訪れていた中曽根首相の車に立ちはだかった!)激しい情熱の伝道者小川武満。わたしはここに「日本キリスト教会」の生きた信仰告白の姿をみる。井上の教義学的営みは決して自己完結してはいない。他方あまりにも政治的すぎると思える小川の行動は決して表層の状況分析からではない(『地鳴り』キリスト新聞社第3章 神学的基礎を築いた時代参照)。わたしはこの両者に教義(教理)と政治的態度決定の連動をみる。なぜなら《教会教義学は徹頭徹尾、政治的なテキストなのだから》(宮田光雄『カール・バルト 神の愉快的なパルチザン』岩波現代全書参照)。あのあと、わたしたちはそれぞれの形で抗議行動を行った。臆病なわたしは抗議者の群れに紛れ込み車列の行く末を見守っていた。すると、数人が「公式参拝反対!」と突如声をあげたのだ。ところが、その中にいた公安にすかさず首根っこをつかまれ力づくで群れから引き離されていった。権力に物申すということの恐ろしさを肌身で知った瞬間だった。



あれは、遠い過去の、一瞬の出来事だったのか。否!昔のことでも他人事でもない、「今」に続く「わたし」の足元の現実になってきた。それほど時代は息苦しくなっている。そうではないか。もはやわたしの前に行くたくましい先人たちが次々少なくなるなか、今自分に言い聞かせる。どんな小さな器であっても、どんなぶざまな姿をさ

らしても、どんな貧しい言説を語ろうと、せめて今度こそ逃げることはすまい。教会は政治と無関係などと言って。これが前の世代から預かった責任であると思うから。そしてそれは、ユダヤ教宗教原理主義とローマの政治権力に一步も退くことなく十字架にその身をさらし、自由と解放の世界を開いたナザレのイエスのあとに続く者たちの行く末でもあると思うから。

(夕張伝道所牧師/

中会ヤスクニ・社会問題委員長)

<報告1>

谷内 由紀江

ヤスクニ・社会問題委員会公開学習会

「改憲の最大ターゲットはどこにあるのか」
一天皇制と憲法24条から考える—

講師：清末愛砂氏

(室蘭工業大学大学院准教授)



曇り空の7月15日「海の日」、日本キリスト教会札幌琴似教会において、当委員会の公開学習会が持たれました。清末先生をお招きし、80名を越える

参加者が、お話をいただきました。

私にとっての憲法改正というと、9条や緊急事態条項ばかりが頭にありましたから、天皇制と24条の関連という新たな視点からのお話は興味深いものがありました。

日本国憲法第1条には、象徴天皇について書かれてありますが、保守改憲派にとっては、これが非常に邪魔であり、天皇は象

徴ではなく、「元首」であってほしいという願いがあること。

また、24条には家庭生活に於ける個人の尊厳と両性の平等について書かれているが、「個人の尊厳」という言葉があるのは唯一24条だけであること。

日本国憲法

第24条 婚姻は、両性の合意のみに基いて成立し、夫婦が同等の権利を有することを基本として、相互の協力により、維持されなければならない。

2 配偶者の選択、財産権、相続、住居の選定、離婚並びに婚姻及び家族に関するその他の事項に関しては、法律は、個人の尊厳と両性の本質的平等に立脚して制定されなければならない。

そして、保守改憲派は天皇の元首化と個人の人権を守る第24条の改悪・削除をセットに考えていること。これまで多くの虐げられた者（特に女性）たちが、この24条によって守られてきたが、保守改憲派はここにターゲットを絞っている事に、護憲運動側が気づいてこなかった。

以上のことは、私にとっては本当に新しい着眼点でした。天皇制は「個人の尊厳」を謳う24条と、真っ向から対立する制度で、基本的人権を柱の一つとする日本国憲法には、相いれない異質な制度であることがはっきりと示されました。

ところで、改憲右派は個人の尊厳・尊重が嫌い。それには次の理由がある。

① そもそも改憲右派の思想の中には、国民主権ではなく、天皇主権天皇統治（天皇の御世・一代一元号による時間と土地と臣民を支配する）があること。つまり、

天皇及び国家が国民のために仕えるのではなく、国民（臣民）が天皇及び国家のため仕えるという、憲法の基本原則とは真逆の思想に立っていること。

② その際、国民管理の基礎単位を「個人」ではなく「家族」と見ている。そのことによって、天皇を国家の父とする国家構造と父をミニ天皇（家長）とする家庭の構造とを重ね合わせて、これを「美しい日本の国体」とするという思惑があること。大日本帝国憲法と旧民法、教育勅語の思想そのものである。

管理の基礎単位を「個人」ではなく「家族」として、この通念を浸透させることは天皇制の容認に繋がるばかりか、「家族は助け合え」「家族のことは家族内の自己責任で」「家族の問題を外に出すのは恥」という意識や文化を、市民の間に深く刻み込む。結局、政府は国民の福利厚生という最大責任を放棄して社会保障費削減に道を開く。

しかし先ず、憲法は道徳でない。家族の関わりに口を出すものでもない。日本国憲法は、天皇を含む為政者が国民に対して責任を負う為に、尊重し擁護義務伴う規定に他ならない（憲法第99条）。これを国民に生き方について云々する事に用いるなら、それは全くの勘違いと言える。

日本国憲法

第99条 天皇又は摂政及び国務大臣、国会議員、裁判官その他の公務員は、この憲法を尊重し擁護する義務を負ふ。

社会の実相を見ていくと、新元号の発表を受けて、これは「命令に和め、従え」というメッセージなのかと印象が、主に web 上に広がり、慌てた政府は「万葉集からの出典」「“令”は命令の令ではなく、令嬢の“令”で、涼やかな日本国の品格を表す」

等の対抗メッセージを直接・間接に発するに至った。また政府は改元を機に、マスコミを動員して「令和フィーバー」を作り出し、これが妙な盛り上がりを見せた。

新天皇即位以降の「雅子さまブーム」もすごい。これも安倍政権の好きな「輝く女性」と重ならないだろうか。また、天皇が訪問する行き先も、外国人労働者のところなど、政権の意向と結びついていないだろうか。天皇や皇族の行動は、実にみごとに政治と連動していると見える。

二つのご意見を紹介して、終えたいと思います。



「制度を一人の人格として、しかも良い人として語る時には、制度の是非の問題や



制度が持っている暗闇（歴史の責任、宗教性、差別性、特権階級の存在、巨大な財産所有、巨額の税金の消費、価値観や文化観の征服等々）を隠してしまいます。天皇個人の人となりや、人となりによって天皇制を理解しようとする試みは、危険です。



天皇は現在もなお、国家神道の神であり、更に頂点にある神主です。この制度は、明

治政府が創設した宗教制度であると同時に政治制度でもあります。天皇制は、日本国憲法の理念（9条や24条）に抗うものでありながらも、日本国憲法の中に織り込まれている事実。そして、戦後を通じて、天皇を元首化して、憲法9条・24条を削除・改変したいという勢力が常にその機を狙っているという現実。

天皇制についての議論は終わりません。しっかり分析して、議論を深めていくことが大事です。

（札幌白石教会長老／

中会ヤスクニ・社会問題委員）

編集者注

日本国憲法では、既に天皇を元首として扱う7条9項「外国の大使及び公使を接受すること」がある。憲法に定められた国事行為は、すべて政治と関わりがあります。

<報告2>

小泉 三千子

第38回政教分離を守る北海道集会

『思想・信教・表現の自由と未決の大逆事件』

講師：田中伸尚（のぶまさ）氏

（ノンフィクション作家）

去る6月5日、旭川トーヨーホテルにて「第38回政教分離を守る北海道集会」が開催されました。主催の実行委員会は、キリスト教各団体、仏教界及び労働・平和運動などの各団体で構成されており、135名が参加しました。

今回は、ノンフィクション作家田中伸尚氏を迎え、「思想・信教・表現の自由と未決の大逆事件」とのタイトルの講演を拝聴しました。田中氏は、2011年著書「大逆事件—死と生の群像—」で第59回日本エッセイ

ストクラブ賞を受賞しました。この集会でこの講師を招聘したのは、今日の状況は大逆事件が起こった時代と酷似しているという危機感を抱いてのことです。

大逆事件とは、1910年天皇制国家が生み出した最大の思想弾圧事件であり、1882年施行の旧刑法116条に規定された、天皇やその他の皇族に危害を加えたりする行為は、死刑もしくは極刑をもって罰するという罪で、代表的なものとしては、幸徳秋水事件をはじめとして、朴烈事件、虎ノ門事件、桜田門事件が知られています。

幸徳事件では、明治天皇の暗殺を計画したとの疑いで多くの人々が起訴されましたが、首謀者と面識があるだけでも有罪とされ、テロの計画があるのではないかと疑われた段階でも、確たる証拠もない中、謀議があったとみなされ、大勢の社会主義者や非戦主義者たちが検挙・拘束されたのでした。田中氏は講演の導入部分で、2017年5月3日、安倍首相が「第3回公開憲法フ

ォラム」で憲法9条に自衛隊明記を加える案を提示し、2020年の改憲実現に向けて国民の合意を得たいと発言し、首相の並々ならぬ改憲への意欲を示したビデオメッセージが紹介されました。そこでは、安倍政権の基本姿勢が国民主権や基本的人権、ひいては平和主義をも無視していることが明白である施策（特定秘密保護法、共謀罪、テロ等準備罪への傾倒、国家主義的教育の導入や、民意を無視した沖縄辺野古埋立ての強行等）が次々と繰り出され、憲法9条の真髓である平和主義の軽視が見え隠れしています。

また更に田中氏は、丸木位里、俊夫妻が描いた一枚の絵「大逆事件」を紹介しました。そこには、死刑で亡くなった12人の肖像と、背景には絞首刑用のロープの輪が描かれており、更にそれぞれの絶命時間が記録されていました。この絵は2017年丸木美術館にて公開されました。私たちは資料映像で拝見しましたが、暗く陰鬱とした色調



↑ 丸木位里・俊「大逆事件」日本キリスト教会新宮教会長老 大石誠之助の姿も描かれている。

大石誠之助長老：1867(慶応3)年、新宮(現:新宮市)に生まれる。京都・東京で英語を学び渡米。アメリカ、カナダの大学で医学を学び、1895(明治28)年帰郷し、翌年「ドクトルおほいし」の看板を掛け開業する。「アメリカ帰りの新しい医術が光っている上に、患者には至って優しく、貧しい人々に対しても極めて気安く診察する上、診察料も薬代も積極的には請求しない」と、庶民の間では大評判。1899(明治32)年、伝染病学研究のためインド・ボンベイ大学に留学。インドで見聞したカースト制度が、誠之助に人権について深く考えさせるきっかけとなり、社会主義への関心を深くする。2年後、病気のため帰郷し、再び開業。この頃から、地方新聞に文芸作品及び社会主義的評論を投稿するようになる。また、堺利彦、幸徳秋水らと交流、資金援助を行う。1910(明治43)年、天皇殺害計画に加わったとして不当逮捕。共同謀議を行ったとして大逆罪で誠之助も起訴され、絞首刑に。43歳であった。この時、新宮教会牧師も逮捕されたが不起訴であった。尚、誠之助は、2018(平成30)年新宮市名誉市民とされた。〔編集者〕

で、まさに暗い時代を象徴したものと感じました。

日本の裁判制度は三審制度をとっているのにも関わらず、大逆事件の審理は一審のみで瞬く間に死刑判決が出され、瞬く間に処刑に至っています。前掲の著書「大逆事件―死と生の群像―」の巻末には、起訴された26名のプロフィール、罪名、判決結果、臨死の結果（必ずしも刑死ではなく、獄中自殺や病死も含まれる）等が記録・掲載されています。

彼らはいずれも、近代日本における天皇制国家護持を揺るがしかねない平和主義思想や社会主義思想と共に葬られたと言っても過言ではないでしょう。1960年代になってからこの事件の見直しが図られ、徐々に再審請求がなされたり、個々人の名誉回復の動きが出てくるようになりましたが、田中氏は、最も鈍い動きだったのは仏教界であったと述べています。

真宗大谷派、曹洞宗、臨済宗、本願寺派僧侶たちが検挙されましたが、当初は仏教界追放の動きばかりで、彼らの名誉回復運動は非常に遅かったと言わざるをえませんでした。こうした事実は、遠い明治の不幸な出来事であったと看過できないと思いました。田中氏の著作の「あとがき」にもありましたが、戦争に反対し加担しないという生き方を貫き、宗教者として被差別者に寄り添う生き方の中から、個人の自由が実現する社会の模索をしてきた人たちが示してくれた、現代に通ずる問題点を私たちが継承してゆかなければならないと強く感じました。

毎年この集会を開催していく事、かつて軍都だった旭川の地において、政教分離が行われない点で、東京九段の靖国神社より靖国らしいと言われている北海道護国神社

今年の北海道護国神社例大祭
自衛隊制服組幹部の参拝風景 ↓



例大祭のこの時期に、国民を戦争へと駆り立てていく風潮にはっきりとNO！を突き付けていくことへの、強い使命感を感じてきた次第です。

(札幌琴似教会長老)

中会ヤスクニ・社会問題協力委員)

編集者注

日本国憲法制定によって司法界も一変したかに見える中、死刑判決後無期となって戦後を生きのびた坂本清馬らによる無罪を訴えた再審請求を最高裁は戦前の大審院との「法的安定性」の名によって却下した。つまり、いまなお大逆事件は未決のまま生き続けているということを銘記しなければならない。

なお、戦後の事案についても、同様である。1946年食糧メーデーで「ヒロヒト詔書 國体はゴジされたぞ 朕はタラフク食ってるぞ ナンジ人民 飢えて死ね ギョメイギョジ」(表面)、「働いても 働いても 何故私達は飢えねばならぬか 天皇ヒロヒト答えて呉れ 日本共産党田中精機細胞」(裏面)のプラカードが不敬罪に問われた。結局、ヒロヒトからの被害届がないまま親告罪である名誉毀損罪が適用された。1969年、天皇の立つバルコニーの裾に向けてパチンコ玉が放たれた事案では、被害者も被害届もないまま親告罪である暴行罪を適用。廃止されたはずの「不敬罪」は司法判断の中に生き続けている。



<報告3>

小泉 優香

日中戦争の戦端、盧溝橋事件(1937年7月7日)から82年

第34回 7・7 平和集会

「いま、日本を『戦争前夜』にさせないために安倍政権を問う」

講師：笠原十九司氏
(都留文科大学名誉教授)

安倍首相がいう「憲法9条はGHQが押しつけた」「日本国憲法はGHQに押しつけられたみっともない憲法だ」という論を徹底的に粉碎するために、講演は日本国憲法誕生の歴史状況を説明する内容であった。

大正デモクラシーを昭和ファシズムへと転換させた1920年代に外務大臣として軍縮外交を行っていた幣原喜重郎は、当時国内では「軟弱外交」と批判されていたが、彼の国際協調、恒久平和などは再評価されるべきだ。

1946年1月24日に幣原首相がマッカーサーをGHQ本部に訪ね、秘密会談を持ち、憲法草案である「象徴天皇」と「戦争放棄」を明記する事を提案、合意が成立という。これは幣原の秘書であった平野三郎が1951年、「戦争放棄条項等の生まれた事情」について聞き取り、記録にまとめた『平野文書』に記され、現在国立図書館憲政資料室に所蔵。幣原の戦争放棄を掲げる理由には、外交理念であった軍縮があり、それを日本国内の軍備勢力や保守政治勢力に認めさせるために「象徴天皇制」とのセットが考えられた。アメリカ政府やマッカーサーも共産主義革命を阻止するために象徴天皇制利用を考えていた。

戦後73年不戦・非戦を継承した「平和



な日本」を2006年の教育基本法改悪を皮切りに2013年の特定秘密保護法、2014年集団的自衛権の容認、2017年共謀罪法と、「戦争前史」の外堀は埋められた。防衛費は連

続過去最高になり、軍備拡張、日米同盟強化、尖閣問題を口実に米軍の沖縄基地の整備・強化に、日本が在日米軍のために支出する金額は増え続ける。沖縄には基地負担を強いるだけ強いて、沖縄いじめを続けているが、他の都道府県は、自分の所に米軍基地が来るのは困るので、良心に苛まれながらも口をつぐむ。

過去の歴史に学んでみると、一般国民には「見せない」「知らせない」ところで、政府は戦争の準備を長い期間に亘って行なうが一般には気が付きにくい。または反対できない仕組みを準備して「憲法改正」を目指す。安倍政権は「戦争前夜」に突き進んでいる。

特別報告『天皇代替わり—何が問題か』

報告者：浦瀬佑司

(靖国神社国営化阻止キリスト者グループ)

浦瀬佑司氏による特別報告「天皇代替わり—何が問題か」においては、平成から令和への改元をマスコミは「めでたい、嬉しい」と当たり前のように報じられている。

大嘗祭等々の諸行事には色々な意見や問題があるにも関わらず、この国が権力の都合により一色に染められていることに恐ろしさを感じる。その中でこの時代を生きる自分たちは何を問われているのか、と語ら

れた。

前の戦争を体験した教会員からは、太平洋戦争の世相そのままの、キナ臭い思いがするのを肌で感じる、と聞かされる。信仰の先達が残した「憲法問題が浮上した時に、クリスチャンは神経を集中せよ」との言葉が改めて刺さってきた。「信仰告白に生きる教会」に連なるものとして、この世の権力と闘っていく時、真理が全世界を支配することを信じ、神を畏れ祈りもって行動し発言していくことが求められる。今わたしたちが、改憲反対の声をあげなければ、再び1945年の悔いを味わうことになる。そしてその時、平和の神が憐れんでくださるだろうか。私たちは、この罪の深さに気がつかなければならない。

(札幌北一条教会会員)

<報告4>

関口 直文

ミランダ・シュラーズさん講演会 「北海道を原発ゼロの大地に」

講師:ミランダ・シュラーズ氏

(ミュンヘン工科大学教授・原発を止めた倫理委員会メンバー)

ところが実際は、彼らは更にまさった故郷、すなわち天の故郷を熱望していたのです。だから、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさいません。神は、彼らのために都を準備されていたからです。(ヘブライ人への手紙 11:16)

6月2日、日本聖公会札幌キリスト教会にて、ミランダ・シュラーズさん(ミュンヘン工科大学教授)の講演を聴いた。講演の内容はドイツが脱原発へと向かうに至る経緯の説明が主であった。ドイツの原発

は日本とほぼ同時期である1960年代に始まった。当初、主要政党(社会民主党及びキリスト教民主同盟)は原発推進賛成であったという。風向きに変化を与えたのは1986年のチェルノブイリ原発事故であった。これをきっかけとして社会民主党は脱原発へと転換する。しかしドイツ政府の原発政策に大きな変更はなかった。だがドイツが脱原発へと向かう出来事が起こる。2011年3月11日の福島原発事故である。これ以後ドイツは政府主導で次々と原発の運転停止を決定していった。



かと言ってドイツは原発問題への対応が速かったわけではない。当初は日本とさほど変わらない状況であった。チェルノブイリ原発事故以降すぐに原発の稼働を停止したイタリア

と比較すると明らかだ。しかし3.11の原発事故はそのようなドイツの原発政策に大転換をもたらした。ドイツは脱原発の道を選んだ。だが事故当事国でありながら日本はそうではない。3.11の原発事故で原発はコスト的、リスク的に合理性の欠いたものであったことが明らかになった。それにもかかわらず日本では原発を止められない。なぜドイツでできたことが日本ではできないのだろうか。日本はなぜ合理的行動がとれないのだろうか。

*

政府も原子力村も原発に合理性がないということを知らないわけがない。なぜ言えないのか。原発は危ない、原発に合理性はないということと言えない「空気」があるのではないだろうか。ここでいう「空気」とは山本七平が『「空気」の研究』の中で語

っているものである。すなわち「空気」とは「教育も議論もデータも、そしておそらく科学的解明も歯が立たない“何か”である。」政府関係者も原子力村の構成員もその言動を支えているものは科学的根拠ではなく「空気」である。もう原発を止めようとは言えない「空気」によって皆の言動は支えられている。「空気」は日本における同質性によって発生しているのかもしれない。

「私とあなたは同じ日本人である。であるから話し合うまでもない」「長いものには巻かれろ」。こういう思考回路ではないだろうか。このようにして、各人が本当のところどう思っているのか話し合うことはない。

ドイツには「空気」がない。あったにしろ「空気」によって人が支配されることはない。その根底にあるのは「私とあなたは別の人間である。ゆえに議論が必要である。」というお国柄であろうか。実際アンゲラ・メルケル首相は「空気」に縛られなかった。キリスト教民主同盟の党首であり原発推進派であったメルケル首相は2022年までに完全な脱原発を達成するという大胆な方針転換を短期間のうちに表明した。この決定に影響を与えたのはメルケル首相が設置した「安全なエネルギー供給に関する倫理委員会」であった。このメンバーの一人が今回の講演者ミランダ・シュラーズさんである。

＊

彼女は講演の中で「見た目、ドイツと日本はよく似ている。例えば会議というところの場合ダークスーツを着たおじさん（年配者）が集まる。ところが見た目は同じでも違う点がある。ドイツでは誰もが他に遠慮をすることなく自分の意見を堂々と語る。若者であっても年配の権威者や専門家と、ひとりの人として対等に語り合う。」と語った。

＊

私たちキリスト者はこの「空気」にどう対応するか。天を故郷に持つ私たちが本当に大切にしているものは神と隣人を愛するという愛の契約のみである。「空気」は相対化されるべきものである。天に属する私たちは主の御心がこの地において成就することを信頼し「空気」に支配されぬ自由を生きる。

冒頭に引用したヘブライ人への手紙の言葉は、天を故郷に持っている者は、それ故に地においても天を生きる（御心に生きる）ことへと召されている、ということであろう。神と未来世代の前に、御心を生きること。今回の講演はこの世の悪や不正と戦う勇氣、具体的に行動を起こす決意を多くの者に与えた。

「御心の天になるごとく、地にもなさせたまえ」
（札幌豊平教会会員）

＜報告5 前編＞

稲生 義裕

沖縄辺野古スタディーツアー

2019年7月1日～3日、日本キリスト教会大会人権委員会の企画した「沖縄辺野古基地建設反対抗議スタディーツアー」に、中会ヤスクニ・社会問題委員会から派遣され、参加する機会が与えられた。

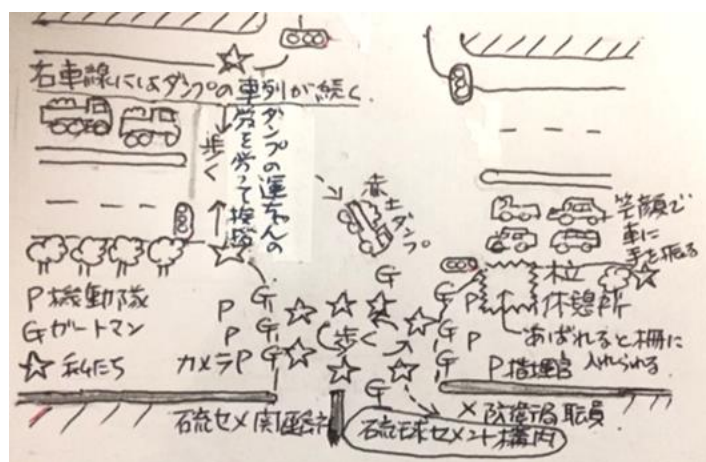
＜沖縄現地へ＞

7月1日午後4時、那覇空港に集合。レンタカーに分乗して夕刻、名護のビジネスホテルに到着。翌2日朝、私たちの向かった先は、沖縄本島東岸にある辺野古ではなく、西岸の名護市安和（あわ）にある琉球セメント正門前であった。

＜非暴力・順法・不服従—抗議行動＞

朝 8 時の始業か、琉球セメント構内にはダンプトラックが進入していく。赤土を降ろし、また採土場へと戻っていく。私たちは、既に開始されていた抗議行動に合流するが、それは思っていたものとは違った。『座り込み』を想定していたが、実際は、正門前の歩道をただゆっくりと歩くというもの。歩行者が一私企業の正門前の歩道を歩くことは、何ら法的に問われるところが無い。この順法行動によって、赤土を積んで構内に進入するダンプトラックを 1 台でも減らす試みを延々と繰り返した。

右折準備をして列を成すダンプは、正面信号が、青から赤に変わり、対向車の流れが切れた瞬間に、右折を開始して琉球セメント構内への進入を試みる。が、我々歩行者があるので歩道前で一旦停車をせざるを得ない。歩行者は故意に立ち止まってダンプの進路をふさいではならないが、ダンプは歩行者の通行が途切れるのを待ってから



動き出す。一挙に 2 台以上の進入を防ぐには、本線上の信号が青から赤（歩行者信号が、赤から青）に変わる時、安全を確認しながら本線上の横断歩道を渡ることによって、2 台目の右折発進を食い止めることができる。この一連の行動によって、信号が一旦変わるとに 1 台、時には 2 台のダンプが構内進入を果たすが、何もせずにいる

時の 4 割程度以下にまで減らすことができる。否、何もせずにしたなら、赤信号で待機するダンプの車列を、警察官が誘導するであろう。こうした場合には、次に信号が変わるまでの 50 秒間に 7～8 台は構内に入ることが出来る。とすれば、この歩道上の歩く抗議行動が、進入ダンプを 1 割 5 分程度に抑える効果を発揮している事となる。

さて赤土は琉球セメント構内でダンプからベルトコンベアへと移され、構内の栈橋に運ばれていく。ここで船積みされると、本島反対側の辺野古に向かうことになる。

海岸には、片手にカウンターを持ってダンプの数をチェックする仲間が立つ。およそ 600 台分を船に積み終える頃合いを見計らって、すかさず 10 艇ほどのカヌー隊が岸を離れ、海上保安庁の船外エンジン付きゴムボートの体当たりを避けながら栈橋に向かい、自分の乗るカヌーを栈橋施設にロープで固く固く縛り付ける。琉セメ社員がロープを解き終えるまでの約 2 時間、赤土船の出航を喰い止めることが可能となる。午後 5 時まで、出航を遅らせることができれば、この日の出航は無し（さすが御役所仕事はピタッと 5 時終業らしい。工事発注元は、沖縄防衛局である）。1 日に 2～3 隻の運搬船が安和の栈橋から辺野古に向かうという。辺野古の海上で、この運搬船は抗議船のお迎えを受ける事となる。

さて、赤土の船積みは安和ばかりでなかった。午後 3 時過ぎに車で 10 分ほどの本部町塩川（もとぶちょう しおかわ）に行き、現地を見せていただいた。背後には複数社の採石現場が大きく広がる塩川の二つの栈橋からも、小型船(ダンプ 20～30 台分を積載か?)が赤土を積んで出て行く。背後の採石現場が、洗浄した石ではなく赤土の採土場となっているのか？この日の塩川は一種

異様な光景を呈していた。私たちが、到着した時には、7～8人もいようか？いやそれ以上か？白ヘルにマリブルーの制服に身を包んだ警備保障会社のガードマンが、炎天下 1メートルおきにピシッと不動の姿勢で立ち並ぶ。帝国警備という地元企業だ。沖縄県警機動隊員は10～15人もいたであろうか。彼らはリラックスして、こちらを一瞥するだけでブラブラしている。

この日の塩川には、抗議行動を想定して大量のガードマンを配備したのだろうが、反対運動側は参院選の公示を受けて俄かに忙しくなり、塩川での抗議行動は控えざるを得なかったということらしい。

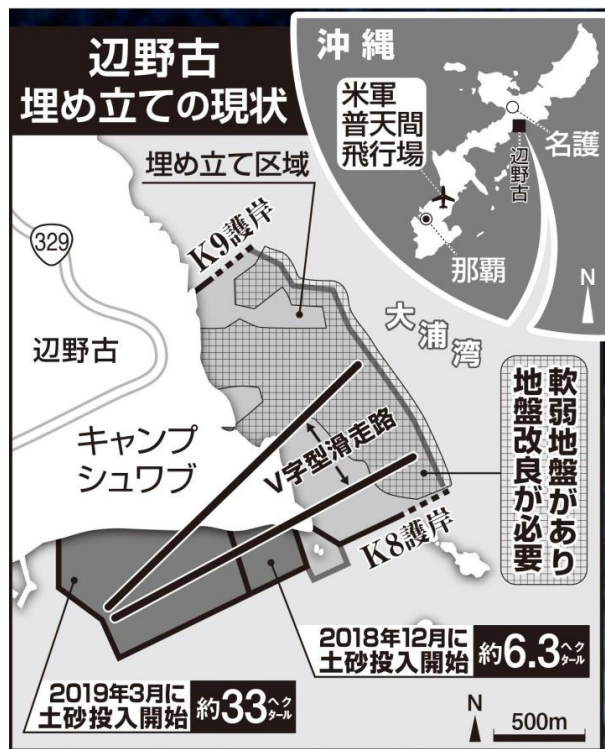
<申請外違法工事の実態>

参考までに書き添えると、米軍施設キャンプシュワブを拡張・海浜埋め立てをする形で設計された辺野古<新>基地であるが、2014年の工事開始以降、様々の申請外工事や無申請違法工事が、市民の情報公開請求によって明らかにされてきた。このたび私たちは「赤土」の搬入を順法行動によってさえぎる試みに加わったが、この「赤土」を埋め立て用材とすることは、申請外の違法行為である。国が沖縄県に申請した埋め立て用材は、海洋汚濁と外来生物侵入を防ぐ為の洗浄を終えた石材であった。ところが実際は、環境破壊をもたらす赤土を使用し、県の調査に対しては、罰則規定が無い事をいいことに無視を決め込んでいる。水質汚濁や騒音に極めて敏感なジュゴンの死体が見つかった事と無関係ではないだろう。更に琉セメ等の民間企業の栈橋を使う申請も出ていない。

あえて地元企業を使うなど、沖縄の中に分断を作り出そうとしているとも見える。

法を犯して工事を進める政府は、県民投票で7割が辺野古基地建設反対の意思表示を

した沖縄の民の声に耳を閉ざして「県民投票に法的拘束力は無い」「これ迄通り粛々と進める」と工事を強行している。



週間女性 PRIME の Website より
(2019年8月11日)

<辺野古新基地工事は頓挫する？>

ところで、辺野古新基地は完成するのか？

政府は、当初計画を変更して、埋め立てのしやすい辺野古集落側から工事を進めている。既成事実化を図って、反対の意思を打ち砕くというのか。ところが、「辺野古新基地工事はおのずと頓挫する」という観測がある。その根拠は、残念だが政府が民意を聞くようになるのではない。工事そのものが頓挫するのではないかとと思われるからだ。既に防衛局が認めているように、滑走路予定地下には断層がある。これが活断層であれば滑走路は使えないのだが、防衛局は専門家による調査と判断を行わない。これを行わないことには理由があるとも言える。仮に活断層で無いとの結論を得たとし

ても、別の大問題がある。V字型滑走路の先端となる大浦湾側の埋め立てができるのか？未だ全く手付かずにいる大浦湾は深いばかりか、海底にはマヨネーズ状の超軟弱地盤が当初の予想を超えて厚く存在することが判明。沖縄県の試算によると、工事には最低 13 年がかかり、総工費は 2 兆 6500 億円と。情報公開請求を繰り返し行ってきた土木技術者北上田毅氏によれば、最低 15～20 年の工期を要すると。政府は 77000 本の砂杭を打つという。それには先ず、大量の土砂を大浦湾に投棄することが前提となる。そんな工事が可能なのか、また、させてよいのかである。この大浦湾側の工事の困難さを勘案して、工事の進捗状況は今年 5 月時点で計画全体の 2.8%と、沖縄県は言う。莫大な血税を注ぎ込んで軍事基地を建設する「平和への逆行」に、私たちは行動する市民として向かい合いたい。

＜軍事基地建設をめぐる人と人＞

話は、安和での抗議行動現場に戻るが、行動の 2 日目も晴天の暑い陽射しの下にあった。取材記者も建設反対運動支援者によって運び込まれた冷たいゼンザイで体を冷やし、木陰でパソコンを打つ。顔見知りでも初対面でも繋がりあって行動し、労わり合って無理をしないし、無理はできない。当日も、気温 32 度で高湿度、路面温度は 40 度超の炎天下。私たちの同行者の一人が熱中症に侵されつつあった。それをいち早く察知したのは、沖縄県警機動隊員の若い兄ちゃん。御礼を述べると『俺たち慣れてますから、わかります』と。二人の機動隊員が、抗議行動をする者達が体を休める木陰に自然に溶け込み、介抱にも関わってくれた。彼らは課せられた職務だけでなく人を見ていた。有り難い事だった。いや、そればかりか、この光景に出会って、「そうだ、

ここに居るのは皆、沖縄の人だった」と気づかされた。赤土ダンプの運ちゃん・琉球セメントの社員・琉セメに雇われる帝国警備保障のガードマン・沖縄防衛局の公務員、機動隊員、いわゆる賛成派と見える人々も皆、沖縄の人。基地建設反対の声を挙げる人も、炎天下にダンプの前を歩くおばあちゃんも、もちろん沖縄の人。

沖縄の人は、米軍の軍事基地問題の前に、それぞれの今日の暮らしを立てるために、やむなくそれぞれ立場を異にして、労働し、行動し、語り、また沈黙する。

この方々は等しく、アメリカの軍事戦略の故に騒音や事故の危険にさらされ、米兵による日常的犯罪多発(レイプ・殺害)の中に身を置き、日本政府による度重なる沖縄差別政策と、本土日本人の無関心や差別感情という厚い壁の向こう側で、来る日も来る日も生きてこられた。

基地建設に反対を表明する私たち本土人が、「反対派」として現地に乗り込み、「賛成派沖縄人」と厳しく対峙すればよいという単純なものではない。本土人は、すべての沖縄人の抑圧者として生きてきたことを真摯に認めることが何より先決で、その上で沖縄人の日常である基地問題に、日本人としての「基地問題当事者」意識をもって関わることなのだ…ジワッと思い知らされた。

[沖縄報告 後編] 予告

＜沖縄と日本との歴史＞＜本土の日本人一被植民地の植民者＞＜日本の民主主義を育む＞
＜平和を築く視座を何処に—平和の地政学＞
(札幌豊平教会牧師／

中会ヤスクニ・社会問題委員会書記)

＜編集後記＞ 支配と抑圧・分断・対立を絶え間なく作り出す世にあって、迎合や妥協ではない深い調和を生み出す取組みに、静かに向かって参りましょう。(I)
＜日本・在日教会共同声明＞私たちは日本の歴史責任を直視し、韓国のキリスト者・市民社会と建設的対話を続ける(2019.8.15)が出されました。和解の福音に立つ教会の力量が問われています(w)